

〈書 評〉

Bruce Caplan 編

Rehabilitation Psychology Desk Reference

明石 謙 (川崎医科大学リハビリテーション科)

Bruce Caplan 氏の編集による“Rehabilitation Psychology Desk Reference”を通覧する機会を得たのでここにその内容を紹介したい。

27名の執筆者によって構成されているこの本は560頁のややぶ厚い本である。

編者は“前おき”でこの本の目的について述べている。即ち「臨床的リハビリテーションの場における心理的問題のスペクトルに関するリファレンス」であるという。

第1部はリハ医学によく見られる疾患、即ち脊髄損傷、頭部外傷、脳卒中、慢性疼痛について一般的な紹介と心理学的特徴が取り上げられている。編者が“reference”

と言うだけに多くの文献の review がされており、その意味でも有用であろう。

第2部は心理・社会的 matrix、患者・家族・スタッフと題されている。この部分からいよいよ臨床心理学らしくなってくる。障害の原因となる疾患での拒絶・うつ状態、慢性疾患への家族の適合、患者とスタッフ間の促通、破滅的な疾患と介護者、が各々1章を成しており、実に示唆に富んだ面白い部分である。

第3部はリハ神経心理学と題され、脳障害について述べられている。かなり具体的な記載もあり参考になる。

第4部は治療技術である。社会

的習熟、バイオフィードバック、行動修正などについて述べられている。

第5部はトピックスで、性機能、リハにおけるカウンセリングについて紹介されている。

第6部は障害の原因となる疾患の医学的な解説と薬理学について記しており、医師よりも心理学専門家のための章であろう。

以上、大雑把に非心理専門家の眼で紹介したが、第1部で染色された糸を第2部、第4部が各々縦・横の糸となり織物を作り、第3部、第5部はその織物に染め出された美しい模様ということができよう。心理学者やリハ医で心理学に興味のある方に御薦めしたい。

(B5, 560頁, 1987, ¥9,240, An Aspen Publications, Rockville, Maryland. 医学書院洋書部取扱い)